

若山牧水『別離』における旅中詠への一考察

ー〈生命〉への凝視の視点からー

台湾大学 院生 王瑋婷

一、はじめに

若山牧水は、尾上柴舟が「そのかみの西行芭蕉良寛の列に誰置くわれ君を置く」と詠じたように、旅の歌人として知られている。牧水自身も「人生は旅であり、歌は人生の「旅のその一歩々々のひびき」で「命の碎片」である¹と述べ、生涯旅をし続け、旅中詠を多数詠じたのである。

そんな牧水は第三歌集『別離』によって文名を博した。歌集成立の背景には、園田小枝子という女性との四年間に亘る実らない恋があった。『別離』自序に、牧水は歌集出版の目的につき「昨日までの自己に潔く別れ去ろうとするところに外ならぬ。(中略)全然過去から脱却して、自由な、解放せられた身になって、今まで知らなかった新たな自己に親しんで行き度い」と述べている。つまり、「一期の生活」を再度整理することによって、恋の苦痛から脱出しようとしたのである。この意図のもとで、『別離』の上巻において、恋の喜びの詠歌が多く、下巻には、互いの心のズレによる恨みや悲しみ、ひいては死への希求も見られ、そして破局を迎えた後、苦痛に迫られて自身の生命の相を深く問わざるをえない心境への転化の過程が記されている。上田博が『別離』について「実らぬ恋に身を焼いた自身の〈生命〉の凝視の中から誕生したのである²」と指摘し、また伊藤一彦も「恋愛の苦悶と挫折を通して人間にとっての自己とは何かを明らかにしようとした歌集」³であると説いたように、「過去」から脱却し「新生」を求める『別離』において、明らかに自身の「生命」への凝視が最大の主題となっている。

恋以外に、『別離』においては「旅」の歌も多数詠まれている。伊藤益は日本の旅の文学者たちの思想に現れる「旅」という空間の役割について、『私』の原拠たる故郷（家郷、家）から『私』を引き離すことによって、『私』を、『私』が『私』と対面する状態、すなわち対自態のなかに置⁴き、自己の内面への「眼差し」を持たせる場であると指摘した。となれば、『別離』における旅も、歌人が自己の内面への凝視を果たすのに適切な場と見做すことができるのではなかろうか。旅中詠への考察が、「生命」が各段階で呈した様相を把握するのに有効である可能性が高いと思われる。そこで小論では、歌集の構成上四つの重要な段階—「青年期」「恋の絶頂期」「破局の予兆」「終篇近く」—の中から各自代表的な旅中詠一連を選出し、旅での自身の生命への省察を考察していく。それによって、旅が『別離』の中での役割、各段階で歌人がどのように「生命」を観照したのか、どのように「新生」の道を辿ったのかなどを明らかにしてみたいと思う。

二、分析手法—歌を連作として読む

¹ 第二歌集『独り歌へる』自序

² 上田博『和歌文学大系 27 別離』2000 明治書院 P.210

³ 伊藤一彦「『別離』の世界」『牧水の心を旅する』2008 角川学芸出版 P.119~120

⁴ 伊藤益「存在への志向性」『旅の思想—日本思想における「存在」の問題—』2001 北樹出版 P.21

歌の考察に入る前に、まず小論での歌の分析手法について説明しておく。

明治 43 年 4 月に刊行された『別離』は、第一、第二歌集—『海の声』(明 41・7)『独り歌へる』(明 43・1)を再編し、さらに新作を加えてできた作である。歌が八割以上原作と同じながら、配列上は大きく異なる部分が見られ⁵、また、歌集の自序や詞書などにも、牧水の伝記的事実といくつか食い違い⁶があることは、諸氏の先行研究⁷によってすでに究明されている。その成因について諸氏の見解は銘々であるが、大まかに言えば、森脇一夫と上田博は伝記的事実を重視する立場を取り、「記憶違い」や編集上の意図による⁸と指摘したが、それに対して、白石良夫と伊藤一彦は作者の編み直しの意図を重んじ、『別離』を「連作」として読む可能性を提出した⁹のである。さらに後者は、序文に「歌の掲載の順序は歌の出来た時の順序に従うた」とあるのが、「作品『別離』の中に流れる時間」¹⁰、または歌人の「『内的生活』¹¹の時間の『順序』¹²を指しているとも指摘した。

小論ではさらなる精察を行う余裕が無いが、『別離』上巻巻頭にある「明治 37 年 4 月」との日付はちょうど牧水が上京した時期と符合した上に、巻頭歌¹³も初出期日に関わらず、思郷の歌であるため配置されたこと、または「安房の渚」一連につき、詞書にある日付は伝記的事実と異なるのが一種の創作手法¹⁴として捉えられることなどから推察すれば、伊藤

⁵ 上巻は主に『海の声』からの選歌で、下巻は主に『独り歌へる』によるが、上巻の歌の配列は『海の声』と大きく異なる部分があり、下巻は大概『独り歌へる』の順による。

⁶ 例えば、以下の食い違いがある：(1) 自序に「廿歳より詠んだ歌の中から一千首を抜き…」とあるが、牧水「廿歳」、つまり明治三十七年の作は集中にない。(2) 上巻巻頭の日付は、「自明治三十七年四月至同四十一年三月」とあるが、森脇一夫の考察によると、「明治三十七年に発表されたものは皆無、三十八年一二月に発表されたものが一首あるのみで、他はすべて三十九年以後の発表」「四十一年の五月・六月に発表されたものも見られる」のである。(3) 210~285 の一連の歌の詞書に、「女ありき、われと共に安房の渚に渡りぬ、われその傍らにありて夜も昼も断えず歌ふ、明治四十年早春」とあるが、牧水が実際に「安房の渚」に行ったのは、明治四十年暮れから明治四十一年早春である。

⁷ 森脇一夫『日本近代文学大系 17 若山牧水集』1971 角川書店 に精査があり、また 白石良夫『『別離』再読序説—『白鳥は哀しからずや』の解釈をめぐって—』『文学 第五巻 第二号』1994 岩波書店／伊藤一彦『『別離』の世界』『牧水の心を旅する』2008 角川学芸出版 などと同じ指摘がある。

⁸ 森脇一夫は牧水の伝記的事実を重視し、上記(2)については編集当時の予定範囲であると解釈し、(3)は牧水の「記憶違い」によるとされている。上田博は、(2)における二つの日付はそれぞれ「日向を出郷し、早稲田めざして上京した記念のしるし」、「恋愛に落ちた歓びの春のしるし」であると述べ、(3)は牧水の「記憶違い」によると指摘した。

⁹ 白石良夫『『別離』再読序説—『白鳥は哀しからずや』の解釈をめぐって—』『文学 第五巻 第二号』1994 岩波書店・伊藤一彦『『別離』の世界』『牧水の心を旅する』2008 角川学芸出版

¹⁰ 白石良夫『『別離』再読序説—『白鳥は哀しからずや』の解釈をめぐって—』『文学 第五巻 第二号』1994 岩波書店

¹¹ 若山牧水『独り歌へる』自序

¹² 伊藤一彦『『別離』の世界』『牧水の心を旅する』2008 角川学芸出版

¹³ 「水の音に似て啼く鳥よ山ざくら松にまぢれる深山の昼を」。初出は牧水上京後の明治 39 年。「山ざくら」とは牧水の故郷・坪谷村に多く咲く花である。以後、山ざくらや故郷の山、父と母が続々と詠まれており、思郷の情は第 16 首まで続く。

¹⁴ 「安房の渚」(210~285)一連の詞書に「...明治四十年早春」とあるが、牧水が実際に「安房の渚」に行ったのは明治四十年暮れから明治四十一年早春である。牧水が歌論『和歌講話』『私の歌の出来た時』(『若山牧水全集 第三巻 歌論・歌話一』P.294)に、「春でなかつたにせよ、私には此等の歌を読み返す時には必ず『春』といふ感じが伴ふ」と述べたように、「恋の春」を強調せんがための手法であらうと考えられる。

氏の「内的生活」順序説がより有力だと考え、それに従いたい。また、牧水が歌の「真実」力を極めて重視するため、小論では牧水の伝記的事実を傍証にして、歌の初出時期や当初の配列などを考慮せず、『別離』中の表現から歌意を考え、分析していくことにする。

三、旅中詠への考察

(1) 青年期 (91~185) 一旅の基調の成立

この一連は、牧水が大学時代、西国巡遊した折の歌を集めたもので、中には歌人の代表歌と目される二首がある。

- 109 けふもまたこころの 鉦^{かね}をうち 鳴^{なら}しうち鳴しつづあくがれて行く
111 幾山河^{いくやまかは} 越えさり行かば寂しさの 終^はてなむ国ぞ 今日^{けふ}も旅ゆく

共に明治 40 年中国の山中を一人旅した時の作で、それが牧水の最初の旅らしい旅だと言われている。111 首について、牧水が「自歌自釋」の中で、

…眞實に自分が生きてゐると感じてゐる人間の心には、取り去る事のできない寂寥が棲んでゐるものである。(中略) 自分の生きてゐる限りは續き續いてゐるその寂寥にうち向うての心を詠んだものである。¹⁵

と解釈した。木俣修はそれを引用しつつ、歌人は「人の世の悩ましき、悲しき、煩わしき」を「漂泊することによって消そう」とし、「漂泊を続け」ることによって「生き甲斐を感じようとし」¹⁶ていると指摘した。牧水は『短歌作法』の中で、「私は『心』といふ言葉、(中略)乃至『生命』若しくは単に『人』といふ言葉を常に同意義に使つてゐる」と述べている。確かにここでは木俣氏の言う通り、「寂寥」を消し去ろうとして出た旅だという解釈もできるが、逆にそこで「寂寥」という「心」に「棲んでゐる」永続な本質を見出すこともできれば、「寂しさの終てむ」国を求めて出た旅は、実は絶えず自分の「心」、自己の「生命」の本質を見つめようとしたものであろう。しかし、旅による生命への実感は、「寂寥」しかないのだろうか。

伊藤一彦はその二首について「あくがれと寂しさは一枚のコインの表と裏」で、「自然の中に生きるいのちの有限性の痛切な自覚がそのコインに輝きを与えている」¹⁷と指摘した通り、二首の歌の根底には牧水の自然観が流れているように思われる。大学時代から国木田独歩に傾倒し、独歩の自然観から多大な影響を受けた牧水は、石井貞宛書簡(明 42・5)に以下のように述懐している。

私は独歩先生に由つて僅かながらも「われ」といふものゝ存在を知らむと志し、「自然」といふものゝ消息をうかゞはむと思ひ立つを得たのです、(中略)宇宙自然の確乎(現実)、宇宙自然の神秘、(中略)それがもう私にとつての唯一無上の幸福であり感謝であるのです…

また、随筆「自然の息自然の声」に、自然は「人類のために出来るだけの助力を与へようとする」¹⁸ものであると綴った。91 首~185 首の一連の中にも、自然を「木の芽ふく」(104)

¹⁵ 「自歌自釋」『若山牧水全集 第四巻 歌論・歌話二』P.398

¹⁶ 木俣修「若山牧水」『近代短歌の鑑賞と批評』1968 明治書院 P.451~453

¹⁷ 伊藤一彦「若山牧水歌集 解説」『若山牧水歌集』2009 岩波書店

¹⁸ 「自然の息自然の声」『樹木とその葉』『若山牧水全集 第七巻 紀行随筆三』P.293

ような生命力に溢れ、「大海の潮」(116)のように永劫たり、人間を抱擁し生かしている(177)ものとして詠じた歌が見られる。歌人と自然との関係性について、以下の一首にもうかがえる。

102 地 ふめど 草鞋 声なし山ざくら咲きなむとする山の静けさ

上田博の注釈通り、それは「自然と、自然に含まれる人の、桜花を待ちわぶる緊張」¹⁹を表現した歌であるが、「待ちわぶる緊張」に自然の中に生息する生命の息吹を実感する喜びが含まれていよう。旅において、歌人と自然との関係性はこのように親しく交じり合い、生き生きとしたものである。そして、自然の脈動を感じつつ、歌人もまた自分自身の生命へ眼差しを注いだのである。上掲の 109 首と 111 首の間に配列されている 110 番の歌はまさにそれであろう。

110 海見ても雲あふぎてもあはれわがおもひはかへる同じ 樹蔭 に

この歌について、上田博は『無窮の一部』としてこの地上の、樹木の蔭に一生を送りゆく存在で自己を捉え、『あはれ』に、変化し、静もる自然界に含まれる生への感慨がある²⁰と評釈した。「あはれ」とは強い感動の表出語で、喜びにも悲しみにも使えるが、自己の生を「あはれ」と感嘆したのは、前に伊藤氏が指摘したような「いのちの有限性の痛切な自覚」であり、それを「地上」に生息する、自身の生命存在を実感した喜びとしても捉えられるのではなかろうか。『別離』における次の一首もその例の一つと見做すことが出来よう。

443 とこしへに 解 けぬひとつの不可思議の生きてうごく と 自 らをおもふ

武川忠一は牧水の歌の内実について、自然の中に生きいて、どこまでも「孤」である哀感と、一つの「個」として存在する自己への愛惜とが並存するという「自己の位相の意識」にある²¹と説いたが、こうした意識は 110 首にもうかがえる。旅の中で無窮たる自然に包まれ、生き生きとした自然とのかかわりの中で、「孤」でありつつも「個」である、自己の生命へのいとおしさが強く実感される。それこそが「あくがれて」(109)「旅ゆく」(111)原動力ではなかろうか。こうした旅中詠の基調は青年期において既に確立できたのである。

(2) 恋の絶頂期 (210~285) —安房の渚にて

宮崎の山村に生まれた牧水にとっては、「海」は幼少期からの憧れの対象であった。「おもひでの記」に、その傾向が見られる。

母に連れられてなど、附近でもやや高い山の頂上へ行つて、あれが海だ、と指ざされると、實に異常の物を見る様に、胸がときめいた。²²

それ以後、海は牧水の胸に棲みつき、第一歌集『海の声』自序に、

われは海の声を受す。潮青かるが見ゆるもよし見えざるもまたあしからじ、遠くちかく、断えみたえずみ、その無限の声の不安おほきわが胸にかよふとき、われはげに云ひがたき悲哀と慰藉とを覚えずんばあらず。

¹⁹ 上田博『和歌文学大系 27 別離』2000 明治書院 P.20

²⁰ 上田博『和歌文学大系 27 別離』2000 明治書院 P.21

²¹ 武川忠一「若山牧水の魅力」『国文学 解釈と鑑賞 第 62 巻 2 号』1997 至文堂

²² 「おもひでの記」『比叡と熊野』『若山牧水全集 第五巻 紀行・随筆一』P.450

と述べている。このように牧水は「海」に憧憬を抱き、「無限」たる海によって自身の有限なる生命への「悲哀」が喚起され、同時に生命の始源をも象徴する海に向かって、なつかしさに似る「慰藉」を求めたのであろう。

『別離』における恋の絶頂期を代表するこの一連の旅先は、まさに憧憬の対象たる「海」で、詞書に「女ありき」とあるように、恋人を伴っての旅である。

前節において、牧水の生命への感受は自然との関係の中で確立するものであると論じたが、このような自然との関係性は恋によってどのような変化がきたされたのだろうか。ここで、まず恋の「陶醉感」²³を詠む例を挙げて考えておく。

- 214 海 哀^{かな}し山またかなし酔ひ^し痴れし恋のひとみにあめつちもなし
217 接吻^{くちづ}くるわれらがまへにあをあをと海ながれたり神よいつこに

上田博は 214 首について、「海を見ても、山を見ても、すべての感情は恋の陶醉感のなかに融けこんでゆく」と述べ、217 首における「海」は「内的宇宙のイメージ化された」²⁴ものだと解説した。前節のように自然の中での自己凝視の眼差しがここでは見られない。恋人に心身とも受け入れられた狂喜の一瞬は「あめつち」よりも永久のように捉え、自然のすべてが歌人の恋に酔った目に融け込んでいったのである。ここで自然との一体化は、上田博が指摘した通り自然の「内的宇宙」化で、そこに「孤」独感も「個」である自由など全くなく、歌人の眼差しはあくまでも恋人と自己の共在に注いだと言えよう。一方、恋人に伴われている状態の孤独感を詠んだものもある。

- 234 闇 冷^ひえぬいやがうへにも砂冷えぬ渚に臥して黒き海聴く
237 海を見て世にみなし^ご児^{さが}のわが性は涙わりなしほほゑみて泣く
238 白鳥^{しらとり}は哀^{かな}しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

234 首に底冷えた寂しさが感じ取られ、また 237 首の「みなし児」に、孤独感と不安が暗示される。次に 238 首に、「不安」の様相が「白鳥」に託されて具象化されたのではなかろうか。

238 首は実は安房行前の作である²⁵が、恋の絶頂期の心情を表そうとして一連に意識的に編まれたものだと考えられる。挿入された意図について、佐佐木幸綱は「恋の不安、恋するゆえの孤独」²⁶を表現したためだと解釈し、島津忠夫も恋の狂喜を詠む眼を「一転する時」、「その澄み渡った愛恋の眼の底には、怖ろしいまでの孤独の悲しみが戦慄となって襲ひかか」り、「白鳥」の歌を「歌はずにはをれない、悲痛な本然の我れに帰るのであった」²⁷という若山喜志子の解説を引用しながら、同調を示している。一方、白石良夫は、男の心

²³ 上田博『和歌文学大系 27 別離』2000 明治書院 P.40

²⁴ 同前掲書 P.40

²⁵ 初出：「新声」明治 40 年 12 月。従来、歌の解釈に「青春の孤独と悲哀」（見尾久美恵『コレクション日本歌人選 038 若山牧水』2011 笠間書院 P.18~19）、または「世にまじることな」い自らへの「愛し」さ（木俣修「若山牧水」『近代短歌の鑑賞と批評』1968 明治書院 P.450~451）を詠じるのであるとする説が多い。

²⁶ 佐佐木幸綱「鑑賞近代の名歌名句 1000 若山牧水」『国文学第 23 卷 12 号』1978 学燈社

²⁷ 島津忠夫「若山牧水」『近代短歌一首又一首』1991 明治書院 P.74~76。島津氏は若山喜志子の 1947 年、光文社刊の『別離』での解説を引用して論じたが、今回この一冊を入手することができなかったため、島津氏の引用文をそのまま使わせていただいた。

情が「愛しみ」に満ちているため、「哀しみ」を託して詠じたものでない²⁸と反対意見を示しているが、歌の配列から考えれば、前者の説がより合理的ではなかろうか。恋人との共在によって自然の「内的宇宙」化を果たした歌人が、「海」にも「空」にも融和できなく、「ただよふ」「白鳥」に向けて「哀しからずや」と声をかけた。白鳥は単独で存在すべきでないという眼差しの底には、恋人を失い、独りになることへの不安が潜んでいると解釈できないこともなかろう。

また、前節の青年期の歌一連に「みどり児」(136)²⁹や「遍路の衆」(175)³⁰など、周囲の他者への視線が見られるが、「安房の渚」においては他者の存在は全くない。歌人・恋人・自然のみによって構成された世界で、恋人との共在への渴求、独りになる不安が詠まれている。この時期の生は、恋人との共在によって満たされる相として呈されているのである。

(3) 破局の兆し (575～643) — 「欺かれ」た後に向かう安房

この一連は「欺かれ」(489)で恋の「終り」(574)を予知した後、一年ぶりに安房の渚へと一人再訪した時の心境を詠んだものである。明治 41 年暮れ、尾崎久禰宛書簡に「海が戀しい、狂人になるほど戀しい、あゝ冬の海、冬の海！」と告げ、恋の苦しみから脱出せんがため安房へ旅立ったが、今度は海によって慰められなかったのである。例として以下の二首がある。

581 海に 来^きぬ思ひあぐみてよるべなき身はいづくにも捨てどころなく

588 日は日なりわがさびしさはわがのなり 白昼^{まひる} なぎさの砂山^{すなやま}に立つ

牧水が安房に滞在中、尾崎久禰宛書簡（明 42・2・4）に「日は日、海は海、僕は僕、それらの間には實に何等の交渉も縁故も無いのである、周囲の人間をしのんでも一向になつかしくなくなつた（中略）僕の心にはたゞ荒れすさんだ自己の外には何のものもないのである」と述べたが、この二首にこうした「日」と「海」との「交渉」がなく、自然に融合できない「われ」の「よるべなき」「さびしさ」が詠まれている。恋人との共在によって満たされた生命が、独りになったことで「荒れすさ」み、かつて慰藉を与えてくれる自然を、今度は自ら拒否したのではなかろうか。

607 わがこころ 濁^{にご}りて重き^{のき}ゆふぐれは軒のそとにも行くを好まず

612 耳^{みみ}もなく目なく口なく 手足^{てあし}無きあやしきものとなりはてにけり

「濁りて重き」心は、外界に出ようとしなない。周りの環境や他者との繋がりを失えば、自己存在のあり方も把握できなくなる。安房滞在中、石井貞宛書簡に「渚に立ちて、石か木の片のごときわが肉魂の此處に嚴存するぞよと自らを顧る時、恐怖と悲哀とザン悔と其他さまざまの感情むらがり起りて」（明 42・2・2）とあった。自然との関係性の中で「生命」を実感しつつ「あくがれて行く」のが本然の自己であれば、こうした恋の苦痛に囚われて外界を拒否し、どこへも行けない「手足無き」「あやしき」「肉魂」となったのは、つまり自己を見失ったことに等しい。この自覚のもとで、歌人は自分の生命への省察を余儀なくされたのであろう。

²⁸ 白石良夫『別離』再読序説—「白鳥は哀しからずや」の解釈をめぐる—『文学 第五巻 第二号』1994 岩波書店

²⁹ 「船酔^{ふなゑひ}のうら若き母の胸に倚^より海をよるこぶやよみどり児よ」

³⁰ 「粉河寺遍路の衆のうち鳴らす鉦鉦きこゆ秋の樹の間に」

597 けふは早や恋のほかなるかなしみに泣くべき身ともなりそめしかな

この歌について、上田博は「永遠に続くかに思われた恋の苦しみが意外に早く去りゆき、それにかわって現実のかなしみが押し寄せてきた、その訪れの早さに驚く」³¹と解説した。この「驚き」は、恋の苦痛が心を蟠踞する絶対的なものから相対的なものへと転化する、一種の転機として捉えられよう。その後以下の二首がある。

610 けふ見ればひとがするゆゑわれもせしをかしくもなき恋なりしかな

616 やどかりの殻の如^{から}くに生^{ごと}くかぎりわれかなしみをえは捨てざらむ

「やどかり」の如き生というのは、「人生は旅である」との概念に通じており、「をかしくもな」と振り返った恋、それが「ひとがするゆゑ」自分もしたもので、恋の苦痛は人生の旅を「生くかぎり」「捨てざ」るを得ない寂しさの中に包含されているとの、視線の転換が二首に見られよう。その後、気分の明るさを詠む歌³²も見られ、歌人はこうした視線の転換によって救いを感じたのではなかろうか。しかし、歌の終盤にまた「敗残者」(640)だと自叙した。束の間に自己を解放できたが、恋による苦痛はまだまだ大きいようである。

房州から帰宅後、石井貞宛書簡に「僕は、今度の房州行を自らひどく感謝してゐます、瞬間にもせよ確に真個の自分に邂逅して来たに相違ありません、もう然しましたかけ離れて杳かに飛び去りましたらしいのです」(明 42・2・11)とあるように、この一連において、恋の絶望から脱出し「真個の自分」への回帰は果たせなかったが、自己の生命の享くべき様相をはっきりと自覚できたと言えよう。

(4) 終篇近く (863~908) 一百草山にて

歌集の終篇近くに、恋人との思い出の地(422~434) 一百草山を再訪した歌 46 首が配置されている。この一連に恋人への未練が見られ、「ゆめ」の中でさえも「君」に会えない寂しさを詠むもの(892)³³や、「君」の「黒髪^{くろかみ}の香」を思い出して動揺した歌(900)³⁴などがあり、恋の陰影にまだ付き纏われていることは、以下の歌からうかがえる。

872 わがころ^{しづ}沈み来ぬれば火の山のけむりの影をつねにやどしぬ

気鬱な自身を「火の山のけむり」と比喻しているのは明らかである。百草山滞在中の石井貞宛書簡に「相変わらず私は心を腐らせて居」り、恋による苦痛の「盡きないのには私も自ら驚いてゐます」と述懐し、苦しみ^{くるしみ}のあまりに死をも考えたが「このまま死んでどうなるのでせう、(中略)腐れながらもしがみついて生きて居る外はありません、(中略)た

³¹ 上田博『和歌文学大系 27 別離』2000 明治書院 P.106。森脇一夫(『日本近代文学大系 17 若山牧水集』1971 角川書店)も「ほかなるかなしみ」は「現実のかなしみ」であると指摘した。牧水は 41 年大学を卒業したが、文芸雑誌発行の仕事を希望したゆえ、定職につかず、一度帰郷したが両親と意見が合わずに逃げようと郷里を出たのである。また、年の暮れ頃に雑誌の発刊に全力を注いだ、資金が集まらないため、失敗に終わった。「現実のかなしみ」とは、この時期の様々な苦悩を指しているだろう。(藤岡武雄『短歌シリーズ 人と作品 8 若山牧水』1981 桜楓社 P.55~58 を参照)

³² 例えば、「628 いと清きもののあはれにおもひ入る海のほとり^{あか}の明るき木立」など。

³³ 「ゆめみしはいづれも知らぬ人なりき寝ざめさびしく君に^{なみだ}涙す」

³⁴ 「松^{まつばやし}林風の断ゆればわがころ^{くろかみ}ふるへておもふ黒髪^かの香を」

だ自分の生きて居るのを、じつと見て居る」(明 42・6・26) しかない心境を述べた。そして、こんな苦しい中で心を慰撫してくれたのが、鳥の啼き声である。

867 とびとびに^{おちば}落葉^ちせしごとわが胸にさびしさ^{ほほじろ}散りぬ^ち頬白鳥の啼く

875 わが死にし^しのちの静けき斯る日にかく^ち頬白鳥の啼きつづくらむ

同じ石井貞宛書簡に「彼等を聴いて居る間、私の生命は全く彼等の音いろと同じ音いろになつて存在して居るのです、その間だけは私も何だか一種の寂しさ、温かさを感じて、心が慰められます」とある。佐佐木幸綱は牧水の鳥への愛着について「他界から来た聖なるものに対するかのごとくにあこがれ、鳥によって自己の地上性を反照し、(中略) 自己救済を希求していた」³⁵と論じた。確かに、875 首において鳥は永久不変な存在として詠じられ、さらに「死」の想念と繋いで、他界の、永遠たる鳥の啼き声と地上にある有限たる自己の生命との対比が見られる。また、867 首において鳥の啼き声は「落葉」に比したが、「落葉」も『別離』において「死」を象徴する重要な歌語なのである。

750 死をおもへば^{こずゑ}梢^{らくえふ}はなれし^{つち}落葉の地にゆくよりなつかしきかな

ここで注意すべきなのは「死」を「なつかし」く捉えることである。大岡信は牧水の自然観に対して、「自然界を『序列』という観点によってとらえるのではなく、『生命の循環』という観点によってとらえようとする態度」³⁶であると解した。「落葉」が「地」に落ちて他なる生命の養分となるように、自分の死も自然の「生命の循環」に包含されており、生命の根源たる大地に再び戻ることとして「死」を捉えたため、一種の「なつかしさ」を感じたのではなからうか。一連に、

908 わがこころ静かなる時^{しに}つねに見ゆ死といふもののなつかしきかな

とあるように、自然の懷に浸り「なつかし」い「死」を思うことによって、「生きて居るのを、じつと見て居る」辛さから束の間の「救済」を得たのかもしれない。そして、このように自己の生命を自然の循環の一部として見る眼差しができたというのは、再び自然が自己を受容してくれる存在と感じられた証である。この時の自然との関係性は、

887 わが行けば^{きぎ}木木の^{うご}動くがごとく見ゆしづかなる日の^{あを}青き^{はやし}林よ

「われ」との交歓があり、生き生きとしたものである。

また、一連に他者への共感を詠む以下の歌がある。

895 きはみなき^{たび}旅の^{みち}途なるひとりぞとふとなつかしく思ひいたりぬ

ここで『別離』におけるもう一首をあげておく。

660 よるべなき^{いのちいのち}生命生命の^みさびしさの^{せかい}満てる世界にわれも生くなり

世に生きる人人は皆「よるべなき生命」で、「さびしさ」を抱えて生きているが、自分もその中の一人で、他者を「同士」として見る目付きによって慰藉を得たのではなからうか。そして、自分を「きはみなき」人生の「旅」の「途なるひとり」と自比したのは、恋の苦

³⁵ 佐佐木幸綱「歌は翼」『底より歌え』1989 小沢書店 P.70~71

³⁶ 大岡信「幾山河こえさりゆかば」『若山牧水 流浪する魂の歌』1981 中央公論社 P.21

痛に囚われる状態から、再び人生に向けて「あくがれて行く」気持ちが整理できた表しであろう。

百草山において、恋の苦痛が依然として消え去らないものの、自然との交歓の中で真の「われ」を感じ、また他者との共感を通して慰藉を得たことで、恋の苦悩に揺るがされた生命は、「真個の自分」に回復しつつあったように思われる。百草山一連の直後に、真の「われ」に「帰らむとする」³⁷ (911) 一首が配置されたのもその傍証となろう。

では、なぜ同じく思い出の場所の再訪に、海には慰められないものの、山には受容されたのだろうか。もちろん経過した時間も考慮に入れる必要があるが、場所の性質も大きな要因だろうと考えられる。恋の絶頂期の一連の考察に、既に海は歌人の憧れの対象であると述べたが、海の対極である「山」の役割についても考えなければならない。

牧水は宮崎県の坪谷村に生まれた。山に挟まれた峡谷で、雨の日に「嶮山が恰も靈魂を帯びたかの様に躍動して見え」³⁸ (「おもひでの記」)、豊饒な山林の生活によって歌人の多感な魂が養われた。友達と遊ぶよりも一人で自然に親しむのが好きな少年牧水の遊び同伴は、常に母のマキであった。牧水は生涯故郷の山々を愛し、家族を愛し、幼年の思い出を晩年の随筆に詳しく記しているが、『別離』にも家族に関する詠歌が見られ、以下のように、多くは故郷の山と一緒に詠まれているのである。

- 9 父母 ちちははよ神にも似たるこしかたに思ひ出ありや山ざくら花
14 日向 ひうがの国 くにむら立つ山のひと山に住む母恋し あきばれ秋晴の日や

このように、「山」は歌人の生の根源を裏付ける場所で、生命の「回帰」の方向であると言えよう。「憧れ」の海にて恋と青春を謳歌し、そして「回帰」の山にて、生の基盤が回復できたという場所の役割は、『別離』に見られるのである。

四、終りに

以上、『別離』における旅中詠を時期別に考察してきた。永劫たる自然の脈動の中で、いつまでも「孤」でありつつ「個」である自己の「生命」を実感し、自由なる生を存分に味わうため「あくがれて行く」のが、歌人の旅の基調である。しかし、恋の絶頂期において、恋人との共在を渴求する生命は「個」になる「孤独」を恐れた。恋が破局した後、慰藉を求めようと「海」に向かったが、閉ざされた心が自然と一体になれない。この苦悩によって生を享くる本来の相について省察し始め、周りの他者へも目を向けた。最後は遂に「山」にて、恋の苦痛を人生における不可避な寂しさとして受け止め、再び自然を享ける自由なる「個」としての「生命」を実感し始めたのである。

牧水が随筆『静かなる旅をゆきつつ』の例言に「旅に出てをる間に、僅かに解放せられた真実の自分に帰ってゐるのだと思ふ場合が甚だ多い」³⁹と綴ったように、「旅」という脱日常の場所で、自己と自然との関係性を見つめることによって真実の「自分」を見出すのが、「旅」の最大の役割だと言えよう。それで恋が破局後の旅にて、歌人は絶えず「自分」の実相を問い、自己の生命へ内省的な眼差しを注いだのである。さらに、この眼差しが歌人の「新生」へと導いていき、歌集の結句、再び海—憧れの方向へと旅立った。

³⁷ 「このごろの迷ひ乱れにありわびて寂びしやわれに帰らむとする」

³⁸ 「おもひでの記」『比叡と熊野』『若山牧水全集 第五巻 紀行・随筆一』P.438

³⁹ 『静かなる旅をゆきつつ』『若山牧水全集 第七巻 紀行・随筆三』P.6

1004 ^{はるまひる} 春白昼 このの港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり

この時、歌人はどのような「新生」を果たしたのだろうか。歌集の終篇近くにもまだ恋への未練が詠まれている点から、恋の苦痛から完全に脱出できたとは言いがたい。牧水が百草山より下山の直前、平賀財藏宛書簡に「戀といふ奴は一度は失敗してみるもいいかもしれぬ、そこで初めて味がつくやうな気がするね」「僕は散々自分が苛められてから、何となく人生のうれしさなつかしさを覚ゆるやうな氣になった、人生の味、恐らくは無限らしいね（中略）けれどもその味を知りゆくことのげにいかばかり悲惨なることであらう」（明 42・7・12）と述べた。人生の味、それは人を愛する幸福と苦痛、現実の辛さ、自分の弱さ、人の生における不可避な寂寥、人々の孤独な魂への共感、深化された自然観…これらすべてが含まれていよう。味のついた「新生」、それは「過去」や恋との決別ではない。過去を受け止めて生きていくことによって、初めて「新たな自己」になり得るのではなかろうか。

上田博は「自分の生命、自己の生きていること、真実力ある歌を、牧水は『生命の欲求力』の強さに求めた」⁴⁰と指摘した。人生の味のついた豊饒な生命を以って、歌人はさらに次の段階へと、歌境を展開していくことになる。

参考文献

- 伊藤一彦『牧水の心を旅する』2008 角川学芸
- 伊藤一彦『あくがれゆく牧水 青春と故郷の歌』2001 鈺脈社
- 伊藤一彦『若山牧水歌集』2009 岩波書店
- 伊藤益『旅の思想－日本思想における「存在」の問題－』2001 北樹
- 上田博『和歌文学大系 27 別離』2000 明治書院
- 大岡信『若山牧水 流浪する魂の歌』1981 中央公論社
- 木俣修「若山牧水」『近代短歌の鑑賞と批評』1968 明治書院
- 佐佐木幸綱「鑑賞近代の名歌名句 1000 若山牧水」『国文学第 23 巻 12 号』1978

学燈社

- 佐佐木幸綱「歌は翼」『底より歌え』1989 小沢書店
- 島津忠夫「若山牧水」『近代短歌一首又一首』1991 明治書院
- 白石良夫「『別離』再読序説－「白鳥は哀しからずや」の解釈をめぐって－」『文学 第五巻 第二号』1994 岩波書店
- 武川忠一「若山牧水の魅力」『国文学 解釈と鑑賞 第 62 巻 2 号』1997 至文堂
- 藤岡武雄『短歌シリーズ 人と作品 8 若山牧水』1981 桜楓社
- 見尾久美恵『コレクション日本歌人選 038 若山牧水』2011 笠間書院
- 森脇一夫『日本近代文学大系 17 若山牧水集』1971 角川書店
- 若山喜志子・大悟法利雄編集『若山牧水全集 第三巻 歌論・歌話一』1958 雄鶏社
- 若山喜志子・大悟法利雄編集『若山牧水全集 第四巻 歌論・歌話二』1958 雄鶏社
- 若山喜志子・大悟法利雄編集『若山牧水全集 第五巻 紀行・随筆一』1958 雄鶏社
- 若山喜志子・大悟法利雄編集『若山牧水全集 第七巻 紀行・随筆三』1958 雄鶏社
- 若山喜志子・大悟法利雄編集『若山牧水全集 第十一巻 書簡一』1959 雄鶏社
- 若山喜志子・大悟法利雄編集『若山牧水全集 第十二巻 書簡二』1959 雄鶏社

⁴⁰ 上田博『和歌文学大系 27 別離』2000 明治書院 P.209